

コロナ禍における 授業提供体制の変化と学生意識

— アメリカ・スタンフォード大学大学院生等座談会報告書 —

鈴木 静・青木 理奈・福井 秀樹
小佐井良太・石坂 晋哉・太田 響子
池 貞姫・十河 宏行・中川 未来

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染蔓延の長期化は、大学生にどのような影響をもたらしているか。愛媛大学も、急激な感染拡大に伴い、授業提供体制が激変して3年目を迎えるようとしている。これまで本プロジェクトは、今回の未曾有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化を行ってきた。具体的には、愛媛大学法文学部の学生を対象としたアンケート2020年度の実施¹⁾、2021年度の実施²⁾のほか、学生手記を収集・分析³⁾、座談会を開催⁴⁾してきた。

これらの調査研究活動を続けるなかで、国内および海外の大学は、具体的にどのような授業提供体制で対応しているのか、その授業提供体制に対して学生はどのように捉え、課題だと考えているのか等、私たちは関心を広げるに至った。本稿では、コロナ禍における他大学の授業提供体制の変更や取組みを具体的に理解するとともに、学

1) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ—学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」愛媛大学法文学部論集第50号（社会科学編），pp37-68.2021.2月

2) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ—2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果—」愛媛大学法文学部論集第52号（社会科学編），pp19-54.2022.2月

3) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ—2020年度学生手記の分析—」愛媛大学法文学部論集第51号（社会科学編），pp93-111.2021.9月

4) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ—2020年度学生座談会報告書—」愛媛大学法文学部論集第51号（社会科学編），pp117-138.2021.9月

生自身の捉え方を把握することを目的に、スタンフォード大学で日本語を学ぶ大学院生、学部生の協力を得て行った座談会の内容を掲載する。

2. 対象と方法

本調査の対象は、スタンフォード大学の大学院生および学部生であり、調査日時、出席者は以下の通りである。座談会は、日本語で行われた。

(1) 座談会および参加者の概要

日 時：2021年12月17日(金) 9：00－11：00（日本時間）

なお、アメリカ時間では12月16日(木) 16：00－18：00

開催形態：オンライン（Zoom ミーティングを使用）

出席学生：5名（男性2名、女性3名）

出席者の名前と所属等は、以下のとおりである。なお、所属等は2021年12月17日段階である。

1人目 A（スタンフォード大学大学院、女性）

2人目 B（スタンフォード大学学部生、女性）

3人目 C（スタンフォード大学大学院、男性）

4人目 D（スタンフォード大学大学院、男性、留学生）

5人目 E（スタンフォード大学大学院、女性、留学生、スタンフォード大学側のコーディネーターを兼ねる）

座談会には、愛媛大学法文学部等の学生・大学院生3名、本プロジェクトメンバーの教員等9名が同席し、適宜発言や意見交換を行った。本稿では、上記のスタンフォード大学大学院生等の発言を掲載する。また発言者への敬称を省く。

(2) 座談会の共通テーマ

今回の座談会では、「コロナ禍における大学生生活への影響に関する日米大学比較－スタンフォード大学の大学院生、留学生の視点から－」をテーマにし、以下の3点につき学生に発言を求めた。① コロナ禍に行われた遠隔授業（オンライン授業）はどのような形態、授業のやり方だったのか。また、大学生活にどのような変化があったか、② コロナ禍が続くなかで、メンタルヘルスには影響があったか、大学のサポートを受けた場合、どのようなサポートが役に立ったか、③ コロナ禍が続くなかで、大学の授業、学生支援に対して、今後、どのようなことを希望するか、である。

(3) 倫理的配慮について

座談会冒頭において、本調査の趣旨を明確に伝え、論文等で公表すること、録音することを依頼し同意を得ている。本稿での発言は、事前に学生それぞれに確認している。学生が発言内容について削除を求めた場合には、応じている。

3. オンライン座談会の内容

以下の発言は文脈が変わらない程度に整えている。なお、冒頭の趣旨説明、教員や学生の自己紹介、重複する発言や感想、最後の教員からの挨拶等は省略している。司会は、法文学部教員が行っている。

一スタンフォード大学では、パンデミックが始まった際には、すべてが同期型の遠隔授業（オンライン授業）だったと聞いている。どのような授業が行われたのか。

A: パンデミックのあいだ、学生として授業を受け、またティーチングアシスタント（以下、TA と略す）を務めた。学生としては、ロシア語の授業が一番印象的だったので、例として取り上げたい。この授業が、最もテクノロジーを活かしたものであった。外国語の授業は、対面でないと言語力が身に付かないという意見が多いが、この授業は、典型的な対面授業より成功を収めたと思う。以前から、週に1回、新しい単語をクイズ方式で答えさせる工夫がされていた。パンデミックが始まった際、スマホに語学アプリをダウンロードさせて、学生たちに単語コンクールに参加させた。学生は、互いに競い合った。とても楽しく、普段より勉強に力を注いだ。

週に1回は、Zoom 利用してグループプロジェクトを行った。Zoom では、簡単にバーチャル背景が設定できるので、その背景づくりも楽しかった。例えば、これは宇宙で道に迷った海賊の話の写真である。私のパートナーが、海賊を助ける優しい動物や仲間を1人で全部演じた。対面授業とオンライン授業はそれぞれの長所と短所があるが、やむを得ずオンライン授業しかできない場合には、オンラインであることを活かせば、効果的な授業ができるのではないかと思う。

B: 日本語の古文の授業について話したい。この授業は、私が履修した授業の中で最もオンラインフォーマットにあわせて、工夫がされた授業だった。週2回火曜日と木曜日の授業だが、スケジュールを変更する対応がとられた。週1回にして90分の授業にし、私たちは先生と時間を制限して会う機会が与えられ、学生同士も同様に時間を制限して会うことで、授業の疑問を解消した。オンライン授業が始まってから、

「Zoom 疲労」という言葉が流行した。それに伴い、授業を担当する先生は、学生に眼精疲労があれば、Zoom 画面をオフにするように指示した。画面をオフにしての受講はよかったと思う。

D：(2021年の) 夏学期は、私は学部生のクラスを担当して教えた。授業はすべて Zoom で行った。週に2回授業があるのだが、1回は講義をし、もう1回は学生たちが自ら報告し、ディスカッションを行った。Zoom の機能を積極的に使用した。ホワイトボードを使って、学生に自分の考えを書いてもらった。学生は自分のプレゼンテーションを準備するために、ペアまたは3人のグループで、直接会わずにお互いやりとりをした。また、授業で中国の映画も見てもらった。私にとってこの授業はよい機会だった。オンラインを利用して、授業ができることは、本当に幸せな気がした。良い点というのは多分そのクラスを教えながら、自分自身も教材を見ながら教えることができることだ。とても便利になった。また、自分の用意したノートを見ながら教えることもできた。多くの留学生は母国に帰っていたので、オンラインでなければ授業に参加することすらできなかった。その意味で、Zoom は、新しい関係を作る機会をもたらした。悪い点はたくさんある。たとえば、人間関係はとても浅くなってしまった。学生は、パソコンの小さい長方形のスクリーンの中に納まってしまい、本当はどのような人かが全然わからない。時々、学生は授業中に自分の画面をオフにしてしまい、こちらから画面をオンにしてほしいと言わざるをえなかった。それでも画面をオンにしない学生もいた。海外にいた学生は、授業に参加することができたが、時差がある場合、大学の授業にあわせ、母国で深夜にクラスに参加することは難しかった。そのため、疲れることも多かった。

さらには、Zoom の機能を使いこなすのも難しかった。ホワイトボードの使い方、グループブレイクアウトルームの使い方などは最初の頃は難しく、時間がかかった。クラスはよく混乱していた。

C：パンデミックがスタンフォード大学に影響を与え始めたのは、2020年3月だった。冬学期が終わるまで1週間に切っていた。その後、4月に授業をオンラインに全面的に変更することになった。私は1年生向けの日本語の TA として授業を教えていたが、授業を統括する先生が状況にあわせて変更して授業を行ったので、私自身にはそれほど負担はなかった。先生方は非常に大変だったと思う。2021年春学期も、私は1年生の授業を担当した。外国語の授業は、対面授業より Zoom を利用した授業の方が効果的だと思う。理由は、Zoom はブレイクアウトという機能があり、その機能を生かして、学生は毎回それぞれ別々な相手と会話することが可能だ。教室での授業の場

合、複数のグループが会話をするときには、その終了には時間差があるが、Zoomのブレイクアウトルームは、皆が同じ時間に終了することができるので、スムーズだった。学生は、オンラインの授業は思ったより効果的だと話す者が多かった。

一日本では、パンデミックが長期化するなかで、学生のメンタルヘルスの悪化が深刻化しているとの指摘がある。スタンフォード大学の場合はどうか。

C:メンタルヘルスには影響は、どちらかというと言はなかった。昨年（※2020年）6月から故郷のミネソタ州に帰り、秋になってから、家を借りて1人で暮らし始めた。もし故郷に帰らずキャンパスにいたら、問題が出てきたように思う。当時、住んでいたアパートは、周りで工事が多く一日中大きな音がしており、勉強に集中しにくかったものもある。図書館等も閉まっていた、アパートのほかにいる場所はなかった。大学のプログラム、サポートは、私については必要なかった。

D:パンデミックが始まった当初、多くの学生は、大学を離れ実家に帰った。大学は誰もいなくて、とても寂しくて孤独を感じた。当時交際していた女性と別れて、メンタルヘルスを保つのが難しかった。他の問題も沢山重なったこともある。父は喫煙歴が長いので、（父が感染して）健康被害がでることを心配した。故郷はポーランドであり、故郷とは距離が離れている分、本当に不安だった。その後、大学から1時間くらいのところに引っ越したが、最初の数ヶ月間は、知っている人がいなくて、孤独な時間を過ごした。

パンデミックが始まったばかりの頃には、大学では（最初に感染症が確認されたと言われる中国武漢市で使われている）「広東語を救う」運動が始まった。理由は、この直前に、大学は唯一の広東語の教師を解雇した。教師は20年間ぐらい広東語を教えており、著名な教師だったので、突然の解雇は多くの人の怒りをかった。この運動を通して、多くのやる気がある人々に会った。毎週1回、その人たちと会ったからこそ、パンデミックの間、私は生き延びることができたと考えているほどだ。その人々は素晴らしい人たちで、よい友達になった。この運動はある程度は成功をおさめた。現在も広東語の授業は続けられているが、この運動の契機となった教師は大学に戻ることはできなかった。

印象的なことは、大学からの連絡は官僚的であったことだ。大学からの連絡はメールがほとんどで、メールには必要な指示と、文中のリストにあるリソースを利用することができるかと書かれている。メールの多くが、用件のみが書かれ人間味を感じないものだった。もっと温かな文章が添えられていたらよかったと思う。スタンフォード

大学は、学生を機械を扱うかのように学生と接した面があり、それが嫌いだった。そのため、大学のメールに書いてあったリソースを利用したことはない。

B: 個人的に、パンデミックは、予想以上にメンタルヘルスに影響があったと思う。私は学部生なので、2020年2月末に、キャンパスから離れ実家に戻った。最初の数カ月は（メンタルヘルスは）とても良かった。オンライン授業の合間、休憩がてら家族と一緒に時間を過ごした。夏休みの終わりまでは、時間を自由に使うことができよかった。秋学期からは、通常通り、授業がたくさん入り忙しくなった。授業はすべてZoomで行われ、非常に疲れた。オンラインだと、授業中にあまり話せない方なので、交流が乏しくなり、授業へのやる気を徐々に失っていった。いつも「前に進んでいない」気持ちを持っていた。早くキャンパスに戻り対面授業を再開してほしいと思っていた。2021年9月にキャンパスに戻ったら、非常に辛くなった。パンデミックで家の中にいるのに慣れていたので、急に大学に出て大人数で会話することが難しく感じた。そのため2021年9月ごろが、メンタルヘルスが一番悪かった。慣れてきたら、問題なく過ごせるようになった。

A: パンデミックのもので、幸いにも周りにサポートされてきた。サポートはだいたい2種類に分けられる。1つ目は、大学からの公的なサポートだった。重要だったのは、教師と職員と学生がなるべく早くワクチン接種ができるように努力してくれたことだ。その上、週1回は、PCRテストを受けることになっていたのも、サポートは心強かった。授業をオンラインに変えた上に、期末試験を中止し宿題の量を減少された。文学の授業でも、期末試験は中止され、みんなで一緒にインターネットを使って詩を書いた。負担を減らすほかにも、一緒に詩を書くことを通じて、大変な時期と一緒に乗り越えた。ストレス発散も兼ねたと思う。2つ目は、学部に属する学生たちの私的なサポートだった。（コロナ以前から）院生のうち若干名が「ソーシャルチェア」という役割を担う。例えばパーティーを用意したり、院生たちが話し合える場を作る。コロナ禍では、急に全てのイベントをオンラインに移さなければならず大変だったと思う。しかし、担当した2人は素敵なソーシャルチェアで、ハロウィンの際には、オンラインでダンジョンズ&ドラゴンズゲームと人狼ゲームをするイベントを実施した。また、クッキーの作り方を教えるイベントもあった。これは、オンラインで作り方を見て、（各自が）自宅のキッチンで真似をする企画だった。とても楽しかった。その他にも、茶道に詳しい院生がバーチャル茶会を主催したり、親しい友達とキャンパスを散歩したり、ピクニックしたりもした。キャンパスは、人がいなくなり寂しくなったが、残った数少ない友達と絆を深めた。素敵な人々のおかげで、メンタルヘル

スを保つことができた。

一所属している大学に対して要望したいことはあるか。

D：3つの要望がある。1つ目は、あたたかなコミュニケーションだ。例えば、コロナ禍が始まった当初は、PCR検査を受けていない人は、キャンパスに入ることができなかった。現在（2021年12月）は、そうではない。当時、僕はサンフランシスコに住んでいて、その検査を受けなくてもいいということになっていた。大学から、簡単なメールが届き、その検査を受けていないとキャンパスに入れないと伝えられただけだった。この問題をどう解決するか、全く伝えられず、少し怒りがわいた。もっと人間味のあるメッセージに変えたらよいと思う。

2つ目は、学生に対する資金を増額することだ。カリフォルニアは住むには非常に高価な場所なので、大学院生には経済的サポートを充実してほしい。スタンフォード大学は資金源の乏しい機関ではないと思うので、経済的サポートがあればあるだけよい。

3つ目は、時間だ。学部生は卒業論文を完成させる時間が長くなるし、プロジェクトによっては、これまで以上に時間が必要になってしまう。例えば、中国に行かないと論文を書けない学生は沢山いるので、プロジェクトを変更し作り変えて新たなプロジェクトを始めた人もいる。そのため、もっと研究する時間が必要になっている。コロナ禍で大学は今までいくつもの新しいポジションを提供してきたが、まだ足りないと思う。

A：希望することは2つ、どちらもささやかなことだ。1つ目は、テクノロジーに長けたアシスタントを付けたいかどうか。例えば、先ほどロシア語の授業に触れたが、その先生は元々テクノロジーの利用に熱心な方だった。全ての先生方がテクノロジーに関心を持っているとは限らない。長年の経験がある先生のほうが、教室で教えることに慣れていて、いきなり全て授業をバーチャルにするように言われても無理があると思う。それゆえ、授業の内容や流れを取り仕切る先生に対し、テクノロジー担当のアシスタントが付いたらよいのではないか。アシスタントを付けることで、先生が授業の形を調整して、理想的だと思われるフォームで授業が展開できると思う。

2つ目は、授業形態の選択肢を増やすこと。最近、パンデミックが少しだけ落ち着いてきて、ほとんどの授業は元通りに対面授業に変更になった。外国語の授業以外だが、なぜなら、必ずマスクをつけてから室内に入ることになっているからで、外国語の授業だと発音のニュアンスが聞き取りにくいからだ。他の授業はもう対面で授業が

行われている。しかし、対面授業にまだ抵抗を覚えている学生もいると思うので、ハイブリッドの選択肢があればいいのではないかと思う。マスクをつけて対面授業に参加したい学生は教室に行き、家にいたい学生は同じ教室の生放送を見る。もちろん、先生は大変だと思うが、アシスタントがいれば簡単にできるのではないか。

B：問題は、メール等の連絡が、温かみがなく効率さを重視していたことだ。この2年間、学校から必要性を感じられないようなメールがたくさん来た。新しい情報ではなく、何度となく送られてくるメールが沢山あり、重要な情報を伝えるメールは遅かったりする。特に、学生団体とかサークルをやっている人は、その活動の計画を立てなければならないが、大学の決定と連絡が遅い。例えば私はアカベラグループをやっていて、メンバーと一緒に歌えないと、活動は難しい。リハーサルの計画を立てなければならないが、今日になって学校から連絡が来た。来学期最初の2週間は、対面での活動を禁止するとのメールで、つまり今までの計画やリハーサルはできないことが分かった。学校は、こうした決定を早く伝えてほしい。もう一つは、学生としてやっぱり言語学の授業も、対面授業で行ってほしい。人数少ない授業は、対面でも可能ではないか。屋外であれば、マスクなしでもできると思う。今学期は韓国語の授業を取ったが、3人しかいなかった。外国語の授業でなければ、ずっと多くの人が受講するクラスが許されているのに、これだけ小規模な授業が対面を許されないのはなぜだろうと思った。将来的には、人数の少ない言語の授業も対面で行えるといい。

C：大学の感染予防対策を聞く機会があった。授業では必ずマスクをつけ、学生、教員、大学スタッフは毎週1回、PCR 検査を受ける必要があり、守らないと教室、図書館、体育館などに入れない。宗教上や健康に関する理由がある以外は、必ずワクチン接種を受けなければならない。95%以上の学生がワクチン接種を受けているし、マスクをきちんとつけている。そのおかげで感染率はとても低い。私は大学の方針について賛成している。その方針が継続することを望んでいる。そして海外留学や海外で行う研究については、予定が急に中止になったり、行けなくなったりを繰り返している。東アジア研究の後輩たちも大変困っている。

私は、1年間、横浜にある IUC 日本語学校（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター Inter-University Center for Japanese Language Studies）で日本語を勉強する予定だったが、日本に行けなくなった。日本留学用の奨学金の額では、家賃の高いスタンフォード大学に通いながらの生活費には足りない。日本に行けないしスタンフォードにも滞在できない状態になり、いろいろ経済的不安を抱えることになった。大学は、特にアパートや学生寮への家賃補助も検討してくれたらよい。

E: 今日（※アメリカ時間の2021年12月16日）から冬休みで、1月3日から冬学期が始まる。最初の2週間は対面ではなくてオンラインにする決定が来た。3回目のワクチンを来年の1月31日までに全員が受けなければいけないとのメールが来た。このように、大事な決定のメールが遅い。もう少し早く送ることはできないのかと思うことが、しばしばあった。オミクロン株の性質上仕方がない部分もあったかと思うが。

一メンタル面への影響はあったか、どのような変化だったか。

C: 私はメンタルに関して相談したことはない。しかし、大学に設置されている相談室（The Bridge Peer Counseling Center）を通じて、他の大学生や大学院生と話す機会があった。電話なので、互いに顔や名前はわからない。コロナ禍でどんな悩みを感じているか、どのように解決できるかなど、話したことはある。

E: 私は、今学期、文理学部内で学科ごとに1人ずつ任命されるメンタルヘルスの相談の窓口になっている。その上で、相談窓口の担当をするシステムがある。他には、24時間いつでも電話で相談のしてくれるサポート（The Bridge Peer Counseling Center）がある。私も電話したことがあり、不安を聞いてもらった。親切に対応してくれた。ここの相談窓口は、必要な授業を履修し、カウンセリングの仕方を学んだ学部生や大学院生が担当している。

一苦労している学生ほど最も声を上げにくい状況にあると思うが、大学はどのような工夫をしているのか。

E: 私は、日本語科目のTAをしている。語学の授業で欠席が続く学生がおり、教員等からメールをしても返信がない。その場合、学生から3日以内に返事が来ない場合、言語プログラムのトップの教員に報告をする。トップの教員から、指導教員に連絡がいき、学生には必ず連絡するシステムができています。TAの私も、欠席について報告する義務がある。メールは必ず出し、オフィスアワーには直接会って話をしようと連絡する。私は学生でもあるので、心配される学生が、強がってしまっただけで「大丈夫」と答えてしまう気持ちもわかる。その意味で、全く知らない誰かが対応する24時間の電話相談は、素直に話せることもある。私は深夜3時に電話して、将来の不安を話したことがあり、丁寧に聞いてくれるので、気持ちが楽になった。

D: 私は、全然知らない人に自分の悩みやトラブルを話すことは、考えたことはない。

相談するなら、親しい人だと思う。私も TA をしていて、その意味で教員としては、学生たちに話してほしい。以前、Zoom を通じて話を聞いてほしいと言われたことがある。Zoom でミーティングする際には、学生たちにそれとなく体調を気遣い、メンタルヘルスの問題があれば、ヘルプすることもある。このように、直接的な電話相談より、さりげなく声をかけて、悩みに対応することのほうが学生たちにはあっているように思う。

—コロナ禍で海外留学の中止があったと思うが、どのように捉えているか。

B: 日本留学を希望しており、3回申請して3回ともコロナ禍のためにキャンセルになった。私は大学院に進学を希望しているので、大学院で留学が可能になることを期待して学部時代に留学するのを諦めた。就職を希望している他の学生は、留学をあきらめなくてはならなかった。一方で、サークルを通じて日本の大学生との交流があり、コロナ禍はオンラインを利用して、様々な活動に参加している。オンラインの交流活動も数多くあり、学生自身がそうした機会を作ることもできる。その意味で、全く諦めざるを得ない状況ではない。

—言い足りなかったことや付け加えたいことがあれば、発言してほしい。

C: 今回のパンデミックによって、どこに住んでいても、生活が大きく変わった。その中で、Zoom や他の新しいテクノロジーのおかげで、授業や学会開催は、これまでは考えられなかった方法で行っている。テクノロジーの発達は、不幸中の幸いだ。世界中、言葉や文化が違っていても、同じくコロナ禍を体験している。この共通経験から、新たなつながりが出てきている気がする。

D: 今回のパンデミック「のせい」で、あるいは「のおかげ」で、得たものがある。それは、様々なイベントを開催するなかで、学習方法について共に考え議論できたことだ。そのことは、一人ひとりのメンタルヘルスをよくする影響を与えたと思う。他の人たちの活動や努力を見る機会があれば、自分自身への刺激になり、困難な問題も乗り越える契機になる。皆の話を聞いて、私も頑張らなければならないと思う。

4. おわりに

本稿では、スタンフォード大学で日本語を学ぶ大学院生、学部生の座談会を開催することで、コロナ禍における授業提供体制の変化に伴う学習状況や生活状況を把握することを試みた。

座談会実施の時期は、コロナ禍が始まり1年半が経過しようとした段階であり、スタンフォード大学では対面授業が復活していた。しかしオミクロン株流行により、新年からの授業はオンライン授業に切り替わることが決定されるなど、授業提供体制は二転三転する時期であった。母語でなく日本語で行われる座談会に参加する学生らは、学習意欲が高い積極的な学生であることがうかがわれるが、コロナ禍開始直後や対面授業の復活など、その時々で不安になったり悩んだりしたことが率直に語られた。

具体的な質問への回答の傾向は、以下のように整理することができよう。「① コロナ禍で、遠隔授業（オンライン授業）はどのような形態、授業のやり方だったのか。また、大学生活はどのような変化があったか」の質問については、参加学生全員が語学系分野を専門とすることもあり、語学授業の様子がそれぞれ説明された。Zoom 利用に加え、語学学習用の既存アプリを活用した授業展開は、受講する学生に好評であったことが注目される。なかには対面で実施する授業以上に、学生の学習動機につながったものもあったと報告された。これらの発言に対し、愛媛大学側の語学担当教員からは、遠隔授業での工夫された授業展開に驚きの声が上がリ、しばしその場で授業方法や既存アプリの情報を共有するに至った。

大学生活の変化については、大学当局からの連絡が、期日が迫ってから変更を伝えることが多いこと、その文面が官僚的であり、学生に不評であった旨の発言が多く見られた。座談会に参加していた愛媛大学学生からも、愛媛大学も同様に官僚的な文面での連絡が多かったことが指摘された。日米を問わず、先の見通しが持てない不安を抱える学生らにとって、大学からの連絡は内容がどのようなものであるかに加え、その伝え方にも配慮が必要であるとの指摘は重要であろう。

「② コロナ禍が続くなか、メンタルヘルスには影響があったか、大学のサポートを受けた場合、どのようなサポートが役に立ったか」の質問については、ほとんどの学生がメンタルヘルスになんらかの影響があったと話された。その上で、大学内に設置されている相談体制を利用する者と、利用しない者のそれぞれの理由が説明された。スタンフォード大学では、カウンセリング手法を学んだ学生による匿名の電話相談が設置されており、24時間稼働していることが紹介された。ほかにも専門家による相談室が設置されており、大学院生に限るようであるが「ソーシャルチャット」と呼ばれる

学生同士の交流ネットワークが設置され、コロナ禍で積極的に活動が行われたことが報告されたことから、愛媛大側の参加者からその手厚さに対して、羨望の声が上がった。一方で、授業を3回以上休んだ場合に、指導教員から学生の安否を尋ねるシステムが作られている。愛媛大学では、1回生必修科目「こころと健康」等では学生の出席状況を確認した上で、同様の連絡体制をとっている。学生の大学生活スタート時の躰き解消を目的としたものであるが、コロナ禍では、学部の専門科目について学生の安否確認の目的でも行うことも検討の余地があろう。

「③ コロナ禍が続くなか、大学の授業、学生支援に対して、今後、どのようなことを希望するか」の質問については、学生の不安な気持ちに対応し、授業形態を多様にすることや連絡方法の工夫を求めるものであった。授業形態の多様化を求める点については、愛媛大学法文学部の学生と共通性を持つ。また、スタンフォード大学学生は、コロナ禍での授業提供体制の変更を振り返り、その経験からコロナ禍においても積極的な意味を見出す発言が多数見られたことが特徴的であろう。

座談会を通じ、日米に共通した学生の不安や混乱を確認するとともに、スタンフォード大学のメンタルヘルス対策の手厚さ、幾重もの相談体制や学生交流ネットワークの存在など差異についても実感する機会になった。

環境の変化が大きくある中で、引き続き、それぞれの大学で、学生側の物理的・心理的負担の軽減を図る必要もある。今後、他学部や他大学との比較をしつつ、学生の心理的な変化に注目して、引き続き調査研究を行っていきたい。

謝辞

今回、この座談会開催にあたっては、スタンフォード大学大学院生である前田春美さんの大きなご尽力をいただきました。また、法文学部等の教員、ならびに座談会に参加してくださいました法文学部学生等の方々に感謝の意を表します。

なお、この研究は、令和3年度・令和4年度法文学部戦略経費、令和3年度・令和4年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）および JSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。